

秘密の恋／エディ・ヒギンズ・トリオ

ジャズはアメリカが生んだ20世紀最高の芸術のひとつとして知られるが、その芸術と大衆の重要な接点となるのがスタンダード・ソングの存在。一般的に知られるスタンダード・ソングを芸術的に演奏することで、ジャズは時代を超えて広く楽しめる音楽になった。ジャズ界の帝王マイルス・デイビスももちろんそう。ジョン・コルトレーン、ビル・エバンス、スタン・ゲッツなどもそうだ。ジャズ・ジャイアント（作曲家でもあるセロニアス・モンクなどは例外として）と呼ばれる人々とスタンダード・ソングは、切っても切れない関係にある。彼らはスタンダード・ソングを演奏することで、不滅の人気と評価を獲得した。スタンダード・ソングは、ジャズにはなくてはならないものなのだ。

日本のリスナーにとっては、アメリカのスタンダード・ソングは本国ほど身近なものではないにせよ、スタンダード・ソングは「知られている」だけではなく、時を超える「名曲」であるわけだから、曲を知らなくてもスタンダード・ソングを取り上げることは、十分有意義であることには変わりない。もちろん、大事なことは、スタンダード・ソングをいかに芸術として聴かせることができるかどうかであって、優れたジャズであるかどうかもそこにかかってくる。

現代のスタンダード・ソングの名人といえば、ベテラン・ピアニストのエディ・ヒギンズである。ヒギンズはヴィーナスレコードの一連のアルバムで近年大人気を博している。その人気の最大の要因が、スタンダード・ソングを素晴らしい演奏で聴かせてくれることにあるのはいうまでもないだろう。ヒギンズのスタンダード・ソングの演奏は、エレガントでリラックスしていて、そして芸術的である。彼はテーマでは原曲のよさを引き出し、あるいは原曲以上に魅力的に演奏し、アドリブでは原曲のイメージから大きく離れることなく、メロディアスな演奏を展開する。そこにはヒギンズの個性と美学が反映されている。

そして、もうひとつ、ヒギンズの特徴として挙げたいのは親しみやすいことだ。ジャズ・アーティストのスタンダード・ソングの演奏はさまざまだが、幅広いリスナーが親しみやすいという点でもヒギンズは傑出した存在だ。

「ジャズっていいね」——そう感じさせてくれるのが、ヒギンズなのである。

そんな、ヒギンズの魅力を最大限に引き出し、ヒギンズにしか成し得ないであろうシリーズが、《ロマンス4部作》である。これはラブ・ソング（スタンダード・ソング）の名曲を50曲選んで、4枚のアルバムに収録。それを2007年内にすべてリリースするという壮大なシリーズだ。これまで第1弾『素敵なロマンス』（全13曲：2月21日発売）、第2弾『恋に過ごせし宵』（全13曲：3月21日発売）がリリースされている。それから8か月、待望の第3弾『秘密の恋』（全12曲：10月17日発売）の登場である。この第3弾もスタンダード・ソングの名曲揃いとなっている。

スタンダード・ソングと呼ばれる曲の数は、「決定版！ジャズ・スタンダード1001」（スイングジャーナル）という本があるように、1000曲をゆうに超えるとみていいだろう。そのぼうだいな楽曲の泉の中から、ヒギンズの個性と美学にマッチした名曲が《ロマンス4部作》に収録されている。また、ヒギンズはこのシリーズまでにヴィーナスレコードに約17枚(!)のアルバムを録音しているが、そこに収録された曲とは1曲を除いて重複していないそうだ。

長年ジャズを聴いていると、「今、この人の演奏でもっと他の曲も聴きたい」「今、この人の演奏を録音しないと文化的損失になる」などと思うことがある。ヴィーナスレコードのバルネ・ウィランがその筆頭だった。バルネの演奏である曲もこの曲ももっと聴きたかった。ハンク・ジョーンズ、アントニオ・カルロス・ジョビン、マンハッタン・トランスファーなどにも同じような思いを抱いたことがある。こういうことはそうあるものではないし、アーティスト自身の気持ちはもちろんのこと周辺状況もすべて揃わなければ不可能だ。今、そうした状況がすべて整っているのがヒギンズなのだ。もっとヒギンズを！もっとヒギンズで！ そんな思いの結晶が、この《ロマンス4部作》なのである。

この4部作のレコーディング・メンバーは、ピアノのエディ・ヒギンズ、ベースのジェイ・レオンハート、ドラムのマーク・テイラーの3人。レオンハー

Secret Love 秘密の恋

Eddie Higgins Trio エディ・ヒギンズ・トリオ

- シークレット・ラブ Secret Love 〈S. Fain〉（4：26）
- ゴースト・オブ・ア・チャンス Ghost Of A Chance 〈V. Young〉（6：01）
- スター・アイズ Star Eyes 〈D. Raye, G. DePaul〉（4：33）
- ラウンド・ミッドナイト Round Midnight 〈T. Monk, C. Williams〉（5：38）
- イースト・オブ・ザ・サン East Of The Sun 〈B. Bowman〉（4：51）
- オールウェイズ Always 〈I. Berlin〉（4：22）
- ブルー・アンド・センチメンタル Blue And Sentimental 〈C. Basie〉（5：59）
- アイ・レット・ア・ソング・ゴー・アウト・オブ・マイ・ハート I Let A Song Go Out Of My Heart 〈D. Ellington〉（6：04）
- バット・ビューティフル But Beautiful 〈J. V. Heusen〉（4：19）
- チーク・トゥ・チーク Cheek To Cheek 〈I. Berlin〉（4：03）
- バット・ノット・フォー・ミー But Not For Me 〈G. Gershwin〉（5：14）
- アバロン Avalon 〈V. Rose〉（4：42）

エディ・ヒギンズ Eddie Higgins 〈piano〉
ジェイ・レオンハート Jay Leonhart 〈bass〉
マーク・テイラー Mark Taylor 〈drums〉

録音：2006年10月14～17日　　ザ・クリントン・スタジオ、ニューヨーク

ⓅⒸ 2007 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.
*
Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan
Recorded at Clinton Studio in New York on October 14 ~17, 2006
Engineered by Troy Halderson
Mixed and Mastered by Venus Hyper Magnum Sound：Shuji Kitamura and Tetsuo Hara
Front Cover:Ⓢ The Estate of Jeanloup Sieff / G. I. P.Tokyo
Designed by Taz

トは10年以上にわたるヒギンズのよき共演者。テイラーはロンドン出身の名手だ。録音日は2006年10月14～17日の4日間。さすがヒギンズというべき異例のハイペースの録音である。ちなみに、2007年はヒギンズがヴィーナスレコードと契約を結んで10周年、またヒギンズが初リーダー作を録音してから50周年にあたる。そんなアニバーサリー・イヤーのラストを飾る、《ロマンス4部作》の完結編となる第4弾『美しすぎるあなた』（全12曲）は、12月19日にリリースされる。そちらのほうもお楽しみに！

シークレット・ラブ
エディ・ヒギンズ・トリオが軽快でスインギーな演奏を展開するこの曲は、ドリス・デイ主演の映画『カラミティ・ジェーン』（1953年）の主題歌。ドリスが歌ってヒットした。作曲はサミー・フェイン、作詞はポール・フランシス・ウエブスター。ジャズではカーメン・マクレエ、デクスター・ゴードン、アーマッド・ジャマルなどが代表的な録音を残している。ゴースト・オブ・ア・チャンス

1932年、ビクター・ヤングが作曲、ネッド・ワシントンが作詞。歌詞を共作したビング・クロスビーがヒットさせたセンチメンタルなバラード。レスター・ヤングをはじめ、デクスター・ゴードン、ズート・シムズなどサックス奏者の録音が目立つ。ヒギンズの演奏は、こういうセンチメンタルなバラードでも美しい品格をたたえている。

スター・アイズ

ラテン・タッチと4ビートを交互に使いながら、ヒギンズがカラフルな演奏をみせるこの曲は、ドン・レイ、ジーン・デポールの名コンビが映画『I dood it』（1943年）のために作曲したスタンダード。チャーリー・パーカーをはじめ、アート・ベッパ、チェット・ベイカー、マッコイ・タイナーらが名演を残している。

ラウンド・ミッドナイト

モダン・ジャズの最高の作曲家であり、ユニークなワン・アンド・オンリーのピアニストであるセロニアス・モンクの代表曲。モンク自身とマイルス・デイビスの録音がこの曲を有名にした。ヒギンズはさりげないテーマ演奏の中にも深い情感をたたえ、アドリブではこの曲の持つジャジーなナイト・ムードをイメージネイティブに広げている。

イースト・オブ・ザ・サン

ブルックス・ボウマンが1935年に作詞作曲したナンバー。「太陽の東、月の西にふたりの家を建ててくらそう」というロマンティックな歌だ。ノルウェーの民話集「太陽の東、月の西」では、王子が連れ去られた謎の城の場所を指す。ここではヒギンズのアドリブの後を受けて、ジェイ・レオンハートがみせる歌心あふれるベース・ソロも聴きもの。

オールウェイズ

アービング・バーリンが1925年に作詞作曲した熱烈なラブ・ソング。バーリンは恋人との仲を彼女の父に反対された時に書いた。そのかいあってバーリンは二度目の妻を射止めた。ジャズの他にも、カントリーのパッツィ・クライン、ロックのフィル・コリンズなど時代を超えて幅広くカバーされている。ヒギンズの演奏は好調そのもの、スインギーな熱をおびていきながらも、落ち着いた安定感があってくつろげる。

ブルー・アンド・センチメンタル

バンド・リーダー、ピアニストのカウント・ベイシーが1938年に作曲したバラードの名曲。ベイシー楽団のテナー・サックス奏者ハーシャル・エバンスをフィーチャーするために書かれた曲だが、マック・デビッドとジェリー・リビングストンが歌詞を共作したボーカル・バージョンのカバーも少なくない。ヒギンズ・トリオは、アルコのベース・ソロも含めて、ゆったりと優美にバラードを展開する。アイ・レット・ア・ソング・ゴー・アウト・オブ・マイ・ハート

「歌を忘れて」という邦題がある。その曲名のように、ヒギンズがホガらかなスイングをみせるこの曲は、デューク・エリントンがエリントン楽団のアルト・サックス奏者ジョニー・ホッジスをフィーチャーするために1938年に作曲した。アービング・ミルズらが歌詞を共作、歌曲としてもヒットした。

バット・ビューティフル

ヒギンズらしい典雅なプレイを聴かせるこのスロー・バラードは、ビング・クロスビー主演の映画『南米珍道中』（The Road to Rio：1947年）のために書かれた曲。ジミー・バン・ヒューゼンの作曲、ジョニー・パークの作詞。恋愛の持つ不思議な魔力について歌われる曲だ。歌手だけではなく、器楽の名演も少なくない。

チーク・トゥ・チーク

一転、スインギーなアップテンポの演奏が登場。アービング・バーリンの作詞作曲、フレッド・アステア主演の映画『トップ・ハット』（1935年）でアステアが歌って大ヒットした。ショパンの「英雄ポロネーズ」を下敷きにして作曲したといわれるが、いわれてみればほんの少し似ているかもしれない。踊りの曲だけあり、歌手やスイング・バンドのカバーが圧倒的に多い。

バット・ノット・フォー・ミー

歌手、インスト両方ともカバーの多い人気曲。特にチェット・ベイカーが得意レパートリーにしたことで知られるだろう。ガーシュイン兄弟の作詞作曲、ミュージカル『ガール・クレイジー』（1930年）のために書かれた。メランコリックな歌と演奏が多い曲だが、ヒギンズの手にかかれば快活になり、新たな魅力が生まれてくる。

アバロン

ブッチャーニの『トスカ』のアリア「星は光りぬ」を引用した1920年の曲。作曲はヴィンセント・ローズ。トーキー映画初期の大スター、アル・ジョルソンが作詞に参加。ジョルソンの歌で大ヒットした。いろんなスタイルの演奏でカバーされる曲だが、ヒギンズは要所にダンサブルなリズムを取り入れて楽しく聴かせてくれる。

（高井信成）